

徳山大学・周南公立大学の EQ 教育のあゆみ

The Record of EQ Education Programmes at Tokuyama University and Shunan University

中嶋克成・小松佐穂子・寺田篤史

(NAKASHIMA Katsushige, KOMATSU Sahoko, TERADA Atsushi)

要旨

旧徳山大学において EQ 教育が正課の授業として導入されたのは、平成 18 (2006) 年度に「徳山大学 EQ 宣言」が発表されてからである。この宣言では「EQ を意識的な育成の対象と捉え、オリエンテーションから卒業までの一貫した新しい教育プログラムとして全学の学生に提供する」と述べられ、翌平成 19 (2007) 年度から総合科目の系列に「EQ 教育系」が新たに追加された。この「EQ 教育系」基幹科目として設けられたのが、「EQ トレーニング」である。本稿では著者らが担当した「EQ トレーニング I」と運営に携わった科目「EQ トレーニング II」について紹介する。併せて、周南公立大学となつてからの EQ 教育についても概観する。

キーワード: EQ 感情知能 EQ トレーニング EQ スタートアップ 自己理解・他者理解

旧徳山大学における EQ 教育

EQ 教育の導入

旧徳山大学において EQ 教育が正課の授業として導入されたのは、平成 18 (2006) 年度に「徳山大学 EQ 宣言」が発表されてからである。この宣言では「EQ を意識的な育成の対象と捉え、オリエンテーションから卒業までの一貫した新しい教育プログラムとして全学の学生に提供する」と述べられ、翌平成 19 (2007) 年度から総合科目の系列に「EQ 教育系 (対象科目は 7 科目)」が新たに追加された。この系列から 4 単位以上を修得することを卒業要件に含めることで、学生が EQ 力を高めていけるようにカリキュラムが設計された (EQ 教育導入までの経緯と、導入以降旧徳山大学が公立化されるまでに確立された EQ 教育“全体”の構成等については、岡野 (2021)、小松・岡野 (2023) を参照のこと)。

教育の特色：演習科目「EQ トレーニング I・II」について

本稿では「EQ 教育系」に配置された 7 科目のうち、著者が担当した科目「EQ トレーニング I (以下 EQT I と表記する)」と運営に携わった科目「EQ トレーニング II (EQT2)」について紹介する。これら 2 科目は、集中講義かつ実習・演習の形で開講された。

EQT I では、学生に身に付けて欲しい EQ 力として「セルフコントロール & コミュニケーション」の力を挙げていた。具体的には「自分自身を正しく認識し表現、制御する能力、そして他者に興味を持ちその立場を理解する能力、そのために必要なコミュニケーション力を得る」こ

とを授業目標としていた。EQT II では「チームビルディング & リーダーシップ」の力の育成を目指し、「チームで目的を達成するために必要となる自分の役割を認識し実行する能力、またチーム全体の協力体制を作り上げる能力」の育成を授業目標としていた。各科目の履修年次は、EQT I が初年次、EQT II が 2 年次以降であった。

EQT I と EQT II の 2 科目の関係性について説明すると、EQT I は初年次生が新入生研修も兼ねて受講するのに対し、EQT II は EQT I の運営をサポートする 2 年次以上の学生を育成するものであった。つまり、EQT I と EQT II は上級生が下級生の学びをサポートする循環型教育の形をとっていた。

本節では特に、著者が EQT I の担当教員であった 2015 年度から 2021 年度までの授業内容について紹介する。

初年次配当科目「EQ トレーニング I」

EQT I は、入学してすぐの時期に新入生全員を対象とした合宿研修の形で実施された。具体的には 4 月初め、入学式と 1 回目の学内オリエンテーションが終わってから前期の授業が開講されるまでの間に、2 泊 3 日の合宿型で実施された。当時 2 学部 (経済学部と福祉情報学部) の新入生は計 300 名程度であり、そのほぼ全員が受講していた。実施場所として「国立山口徳地青少年自然の家 (山口県山口市徳地)」の施設を利用していた。

EQT I の科目担当教員は 1 名であるが、この 1 名が全新入生に対して授業を行うのではなく、新入生約 300 名程度を 1 クラス 25~45 名として計 8 クラスに分け、各ク

スに配置したクラス担任教員（旧徳山大学教員）が授業を行った（科目担当教員は、授業内容、教材等を作成する役割であった）。また各クラスには先述のEQT IIの受講生である2年次以上のサポート学生が配置され、授業支援を行った（図1参照）。



図1 EQT Iの授業運営（1クラス）

EQT Iの授業形式の特色の一つは、2泊3日の授業の中に「教員主導の授業枠」と「EQT II受講生主導の授業枠」の2種類が設けられていることである。まず教員主導の授業枠ではパワーポイントを使用して講義が進められ、新入生がその都度、紙媒体で配布されたワークシートに取り組んだり発表やグループディスカッションをしたりして学修を進めていった。

授業内容はEQT Iが育成対象とするEQ力が「セルフコントロール & コミュニケーション」であることから、自分自身の理解や感情のコントロール、他者の理解、適切な自己主張などのスキルを高める内容であった。まず研修1日目に、20 答法（「私は、…」で始まる文章を20個、作文することで自己概念を明確にする心理検査の一種）など用いた自己理解や自己紹介発表会など、複数の演習を行って自己認識を深めていった。続く2日目は、他者理解や自分の感情のコントロール、アサーション（適切な自己主張）のスキルを学んだ。最終日はキャリア教育も兼ねて、自己実現と自尊感情について学び、最後に人生の見通しや大学4年間の具体的計画を立てる演習を行った（授業内容の詳細は、小松（2017, 2020）及び小松・岡野（2023）の第3章を参照のこと）。

一方EQT II受講生主導の授業枠では、その運営を全てEQT II受講生が担っていた。具体的には「アイスブレイク活動」と「チームビルディング活動」の2つの授業をEQT II受講生が担当した。これらの活動の実施は、EQT II受講生の教育を目的としているが（詳細は次の「2年次以上配当科目「EQトレーニングⅡ」」でも述べる）、EQT I受講生に対しては、特に「チームビルディング活動」の場を、それまでに修得した他者理解、自分の感情のコントロール、アサーションスキルなどのEQ力を実践する場と位置付けていた。

以上の授業内容を通して、「セルフコントロール & コミュニケーション」のEQ力の育成を行った。

2年次以上配当科目「EQトレーニングⅡ」

EQT IIは2年次以上の学生に配当された科目であ

り、EQT Iの授業運営をサポートする学生を育てる科目であった（授業のより詳細な内容については、小松・岡野（2023）の第4章を参照のこと）。学生の役割は大きく2つに分かれており、EQT Iの授業で新入生に直接的なサポート、ファシリテーションを行う「リーダー学生」と、EQT Iの全般の管理・運営を担う「スタッフ学生」に分かれていた。例年リーダー学生としては40名程度、スタッフ学生としては10名程度が履修していた。

まずリーダー学生は、EQT I当日に新入生の各クラスに配置され、直接的に学習のサポートを行った。これ以外に、先に述べた「EQT II受講生主導の授業枠」でその運営を行った。受講生主導の授業枠は2枠あり先述の通り、一つは「アイスブレイク活動」、もう一つは「チームビルディング活動」である。アイスブレイク活動は研修1日目の初めに行われ、新入生の緊張をときほぐしこの後の講義他の活動を行いやすくする目的があった。一方、チームビルディング活動は研修2日目の午後に行われ、新入生がそれまでに修得したスキルを実践する場（さらには他者と協働してチーム活動をする場）を設ける目的があった。

リーダー学生たちは4月開講のEQT Iに先立ち、3月からEQT II科目担当教員の指導を受けながら、それぞれの目的に合ったアクティビティを計画し、研修当日に新入生に向けて実施することが求められた。EQT IIの授業（「リーダー研修」と呼称されていた）は、校内での6～7回の研修の他、実際の合宿施設で行われる1泊2泊のリハーサル研修の形で実施された。これらの授業・研修を通して、EQT Iの当日の運営に備えた。

リーダー学生が直接的に新入生に関わるのに対し、スタッフ学生はEQT Iの合宿研修全般の運営を統括・管理し、バックヤードから授業を支える役割を担っていた。スタッフ学生の研修は1月から開始されEQT IIキックオフミーティングの企画・運営に始まり、研修資料（EQT Iの教材を除く）の作成、EQT I当日の新入生・リーダー学生の移動・誘導計画（食事・入浴などを含む）など、EQT Iの運営を俯瞰的に捉え、2泊3日の全行程が滞りなく進むように準備を進めていった。

以上、リーダー学生とスタッフ学生ではそれぞれの役割に違いはあるものの、それぞれの授業・研修内容を通して、グループで協働して目標を達成する「チームビルディング」と、新入生を導く「リーダーシップ」のスキルを向上させる内容であった。

教育効果の検討

特にEQT Iでは、受講生を対象に受講前後（研修1日目の初めと3日目の最後）で質問紙を用いたEQ力の測定を行っていた。この時に使用していた質問紙は、EQ教育の効果を可視化する目的で学内で独自に開発した尺度であり、信頼性と妥当性を確認したものである（開発過程については、岡野・石川（2014）、小松・岡野・石川（2016, 2018）を参照）。計32項目の質問で構成されてお

り、①自己認識、②自立性・柔軟性（自尊感情）、③目的達成力（自己効力感）、④打たれ強さ・忍耐力（ストレス・コーピング）、⑤他者理解・共感性、⑥自己表明力（アサーション）、⑦チームビルディング、⑧ソーシャルティーマの8つのEQを測定するものであった。

2016年度から2019年度に対面かつ合宿形式で実施されたEQT Iについてその教育効果を検討した結果、全ての年度で受講前よりも受講後の方がEQの尺度得点が高くなり、それは8つのEQすべてにおいて見られた。教育効果の大きさは開講年度とEQの種類によって多少の違いはあったものの、EQT Iによる教育効果は確認できたと言える（教育効果研究の詳細については、小松・岡野（2023）の第5章を参照）（文責：小松佐穂子）。

コロナ禍でのEQトレーニング

完全オンラインでの実施（2020年度）

以上のように非常に高い効果を示してきたEQT I・IIであるが、2020年4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言が発出され、4月16日には対象が全国に拡大されたことに伴い、実施時期が9月に延期されることとなった。しかしながら、9月に入っても新型コロナウイルスの感染が収束する状況が見えなかったため、学内協議の結果、2020年度のEQT Iは、9月13日から15日に、オンラインかつ宿泊を伴わない形で開講することとなった。EQT II受講生が計画・運営していたアクティビティについても、オンラインでの限定的な実施となった。

授業の実施にはMicrosoft社のTeamsを使用した。従来の施設で実施していた形をそのままTeams上で再現するために、「クラス」に相当する8つの「チーム」を作成し授業を行った。「教員主導の授業枠」では、教材は紙媒体ではなくPDFファイルやWordファイル形式で配布され、特にワークシートへの記入はWordファイルへの入力に替えられた。「EQT II受講生主導の授業枠」では当初、対面で実施するアクティビティを企画していたが、EQT Iの開催が9月に延びて準備に時間的余裕が生まれたため、EQT II受講生は改めてオンラインで実施可能なアクティビティを企画しなおし、実施した。

対面・オンラインでの実施（2021年度）

続く2021年度は、EQT Iを従来の対面・宿泊の形に戻して実施することが検討されたが、2019年まで実施していた「国立山口徳地青少年自然の家」では、ソーシャルディスタンスを取りながら宿泊するには規模が小さすぎるということが判明した。県外施設の視察等も行い候補施設を絞っていった。しかしながら、宿泊の可否を決定する時点では新型コロナウイルスの感染は収束しておらず、学内で実施することとなった。また、日程も当初は入学後すぐの4月4日から6日の3日間で予定されていたが、当時の感染状況の影響を受けて急遽、この時点では4月18日（日）と25日（日）の週をまたいでの2日間で開催することとなった（表2は変更後の予定）。日程短縮に伴い、アイスブレイク等のアクティビティの実施時間の変更アイスブレイクを18日に30分、25日に60分に分割実施（予定）、キャリア教育の割愛、最終課題を時間外にする、などの対応をとった。

これを受けて、EQT IIのスタッフ・リーダー学生（スタッフ9名、リーダー47名）を中心に「EQトレーニング2021～感染対策マニュアル～」を作成し、検温スポットを複数用意するなど、対面での実施に向けて準備をしていた。しかしながら、4月17日に学生のアルバイト先で新型コロナ感染が確認された事を受け、安全を図る為4月18日の開催は延期となり、4月25日と他の学内行事等との兼ね合いから5月29日に対面で実施することとなった。最終的には4月25日は対面で実施できたものの（アイスブレイク30分）、その後の感染状況から5月29日はオンラインかつ午後のみの実施（表3）に変更となったため、EQT IIのスタッフ学生はオンライン講義での対応の研修（講師：中嶋）を受け、「オンライン対応マニュアル」（図2）を作成し実施に備えた。

このような事前の準備もあり、4月25日の対面実施、5月29日のオンライン実施とも、大きなトラブルなく終えることができた。2021年度は公立化前年ということもあり、入学試験を厳しくしたため新入生は入学定員の半分程度（EQT I受講生は149名）と少数をスタッフ・リーダー学生合計56名でフォローするという体制だったということもあり、従前にはない特殊な開催方法だったにもかかわらず支援が行き届いた面もある。一方で、当初3日間で組ま

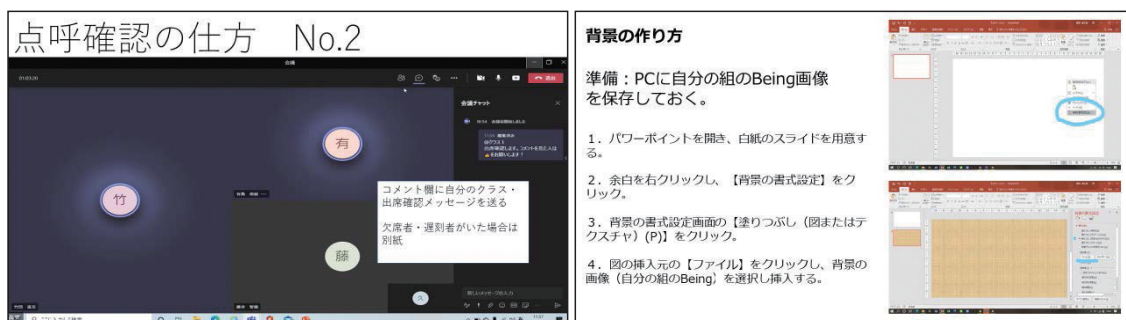


図2 オンラインマニュアルの一部

れたスケジュールを2日間に短縮したことや、オンライン実施に伴う課題もいくつか見られた。

例えば、初対面である新入生（EQT I受講生）の緊張を解きほぐすため、例年は1日目にアイスブレイクを90分とっていたが（表1）、2021年度は日程が2日間に短縮されたことと、その2日間で1か月空いてしまった（4月25日と5月29日）ため、スタッフ学生からの提案で両日アイスブレイクを導入し1日目に30分、2日目に60分行うという設定が組まれていた（表2）。しかしながら、最終

的には2日目はオンライン実施（表3）になってしまったため、その日のアイスブレイクは割愛されてしまい、EQT I受講生はしっかりアイスブレイクができなかった。またアイスブレイクの短縮（1日目短縮、2日目削除、チームビルディング活動も削除）に伴い、EQT I受講生には講義形式が多いと感じたものもいたようである。

また、リーダー学生の役割の一つとしては新入生らの活動の手本を見せる場面があるのだが、日程が1か月空いてしまったことにより、リーダー学生の中には手本の示し方を一部忘れてしまっているものもいたようである。1日目から2日目の間に、スタッフ学生企画の追加研修を実施したりなど対策は行っていたが、不十分な点も見られた。このようなケースを想定し、2022年EQTでは、リーダー・スタッフ学生が内容を振り返られるように、EQT II研修回部分の録画を用意したり、筋弛緩法のお手本動画を用意したりするなど、日程が空いてしまった時でも対応できるようあらかじめ準備した（図4、後述）。

オンライン特有の問題もあった。EQT I受講生が個別のワークをしている際に、例年であれば机間巡視をしながら進捗を確認し、次のワークに進むことができたのだが、オンラインであったためEQT I受講生の状況が確認できず、結果として次のワークに進むのに支障が出ているケースが散見された。

しかし、以上のように、いくつかの課題は見られたものの「オンラインを伴う連続しない2日間」という条件であっても、おおむね支障なく実施された。



写真1. アイスブレイク（初日）の様子

表1. 2021年度当初の実施案

時刻	時間	4月4日
9:20	30分	開講式
休憩（10分）※教室への移動		
10:00	20分	【授業】EQとは何か
10:20	1時間30分	★アイスブレイク活動
11:50		昼休み
13:00	3時間25分 （休憩含む）	【授業】 自己概念・自己呈示 発表と傾聴 自己紹介発表会・ふりかえり
16:25		第1日目終了
時刻	時間	4月5日
9:20	2時間30分 （休憩含む）	【授業】 感情のコントロール リラクセス法・認知のゆがみ
11:50		昼休み
13:00	1時間30分	【授業】アサーション
14:30	2時間	★チーム・ビルディング活動
16:30	15分	【授業】チーム・ビルディングのふりかえり
16:45		第2日目終了

時刻	時間	4月6日
9:20	2時間30分 (休憩含む)	【授業】 自己実現・自尊感情 キャリア教育 大学生活の計画
休憩 (10分) ※ 教室からの移動		
12:00	30分	閉講式
12:30		EQトレーニングⅠ、終了

表2. 2021年度変更後(1週間あき)の実施案

時刻	時間	4月18日
9:20	30分	開講式
休憩 (10分) ※教室への移動		
10:00	20分	【授業】EQとは何か
10:20	30分	★アイスブレイク活動
10:50	1時間	【授業】自己概念・自己呈示
11:50		昼休み
13:00	4時間50分 (休憩含む)	【授業】 発表と傾聴 自己紹介発表会 感情のコントロール (リラクセス法・認知のゆがみ)
17:50		第1日目終了
時刻	時間	4月25日
9:20	1時間	★アイスブレイク活動
10:30	1時間20分	【授業】アサーション
11:50		昼休み
13:00	10分	【授業】チームになる
13:10	2時間35分	★チーム・ビルディング活動
15:35	45分	【授業のまとめ】2日間で学んだこと(最終レポート)
16:20	50分	閉講式ほか
17:10		EQトレーニングⅠ 終了

表3. 2021年度最終的な実施日程

時刻	時間	4月25日
9:20	30分	開講式
休憩 (10分) ※教室への移動		
10:00	20分	【授業】EQとは何か
10:20	30分	★アイスブレイク活動
10:50	1時間	【授業】自己概念・自己呈示
11:50		昼休み
13:00	4時間50分 (休憩含む)	【授業】 発表と傾聴 自己紹介発表会 感情のコントロール (リラクセス法・認知のゆがみ)
17:50		第1日目終了

時刻	時間	5月29日（オンライン）
13:30	1時間20分	【授業】アサーション
14:50	10分	【授業】2日間で学んだこと（ワークシート⑬への回答のみ）
15:00	10分	全体 Team への移動
15:10	20分	閉講式
17:10		EQトレーニングⅠ 終了

対面かつ学内での実施（2022年度）

2022年度のEQTⅠは、学内で3日間（4月5日～7日）にわたり実施されることとなった。2022年度4月の時点では、緊急事態宣言はすでに取り下げられていたが、前年度のEQTⅠの実施の可否を決定する会議の時点では、新型コロナウイルスの感染状況が収束しているか見通しが立たず、学内での実施となった。スケジュールは2021年当初案（表1）を踏襲することとなった。一方で、本年度から徳山大学が公立化し周南公立大学となったことから、EQTⅠ受講者用のテキストは従前のそれをベースにしながら、カリキュラムの変更点やデザインを中心に大きくリニューアルされた（図3）。

2022年度は定員を超えて入学者が入ったこともあり、389名のEQTⅠ受講生をスタッフ・リーダー学生41名という少数で支援する（前年度は149名を56名で支援）

という体制となった。例年よりEQTⅡ受講生（スタッフ・リーダー学生）が集まらなかったのは、①コロナ禍であったため十分な広報ができなかったこと、②2020年～2021年のEQTⅠはアクティビティの実施がほとんどなく本来の対面宿泊型の楽しさを体験したことがあるのは4年生だけであったこと、③そもそも2年生の人数が少なかったこと（定員の半分程度）などがあげられる。そのため、スタッフ・リーダー学生の負担は例年より大きかったが、結果的にはおおむね良い評価を得られた。

このことは、前年度にあげられていた課題などに対応するための準備していたことによるところが大きい。例えば、先にも述べたスタッフ・リーダー学生が演習の手本を見せる際にやり方を忘れていたようなケースに備え、研修内容や演習の手本のやり方を動画にし、繰り返し見直すことができるようにした（図4）。

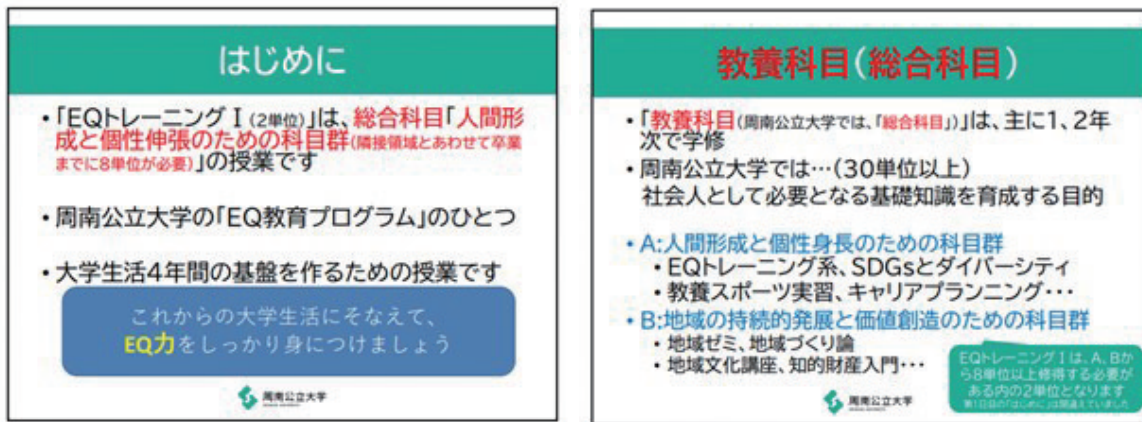


図3 リニューアルされたテキスト（2022年度）



図4 共有した演習動画



写真2. 講義時の支援(左) アクティビティ時(右)

また、感染防止対策として、従前の感染防止マニュアルの運用や検温スポットの設置に加え、アクティビティ(アイスブレイク・チームビルディングなど)の際の教室数を増やすなどの対策を行った。例えば講義時には40名程度のクラスごとで受講しているがアクティビティの際には20名程度の2つのグループに分かれて実施することにした。先述したように元々は、EQT Iの授業で新入生に直接的なサポート、ファシリテーションを行う「リーダー学生」と、EQT Iの全般の管理・運営を担う「スタッフ学生」と役割分担していたため、本来はこのアクティビティはリーダー学生主導で行うはずであったが、EQT I受講生に対しEQT II受講生の数が少ない上に、感染防止対策のためアクティビティ時にはクラスをさらに2つに分け例年の倍のグループ数で実施することとなったため、スタッフ学生にリーダー学生の役割も兼務してもらうこととなった。

2023年度「EQ スタートアップ」

他所でも述べたように(寺田ら, 2025)、2023年度から「EQT I・II」は非開講となった。2023年度は、授業ではない新入生歓迎イベントとしてワークショップ「EQ スタートアップ」が行われた。まず従前の「EQT I・II」と「EQ スタートアップ」の形式的な類似点と差異を述べる。

EQ スタートアップは、アクティビティを通じて入学当初の不安を軽減し、学部学科を超えた交流や友達作りを行い学生生活へのモチベーションを高めること、またイベント参加を通じてEQ教育プログラムへの関心を高めることを目的としており、この点は「EQT I」と同様である。ただし、後述する時間的制約からEQについての講義は省略され、EQ スタートアップにおいてEQ力は「自己理解・他者理解」を促進するアクティビティを通じて「体験的に」学習されることとなった。

また、EQT Iに対するEQT IIのような、上級生による新入生の指導も形式的には引き継がれた。EQ スタートアップは「ワークショップデザインI」の受講生が企画するワークショップとして実施された。ワークショップデザ

インIの受講生は前年度までにEQT Iを学んでいた学生となる。ただし、アクティビティはEQT Iで多数だった広いスペースでの身体運動を伴うチームビルディング的なゲームよりも、より内省的に教室内で「自己理解・他者理解」を促進するワークが志向された。

最も大きな違いは規模である。2023年度入学生は約350名であり、仮にEQT Iを従前の合宿形式で実施する場合には400名を収容する研修施設が必要となったはずだが、大学近隣にこうした施設を見出すことができなかった。また、入学式後のガイダンス期間に新入生を2泊3日拘束する時間的余裕がなく、また合宿での授業実施に不可欠な教員・事務職員の人的余裕もなかった。そこで新入生を学部学科混成の約110～120名ずつの3群に分け、ガイダンス期間の3日間の各日の午後に1群ずつ「EQ スタートアップ」に参加することとした。各群はさらに4つのクラスに分けられた。こうして半日(約3時間)というかなり縮小されたプログラムが計12クラスに対して実施された。

「ワークショップデザインI」とは

「ワークショップデザインI」とは、少人数チームで協働して学内向けワークショップを企画・運営することで、EQ力や課題解決力の伸長を目指す科目である。当初は新たなEQ教育プログラムの柱として2024年度の学部学科の新設・改組に合わせて開講する予定であった。しかし、「EQT I・II」が未開講となることが決まった後、EQ スタートアップを「学内向けワークショップ」として企画する授業として、2023年度に前倒して開講することとした。

ワークショップデザインIの受講生は4つのチームに分かれ、各クラスで行われる約2時間のワークショップを1つずつ企画することとした。EQ スタートアップでは3日間に4クラスずつのワークショップが行われるので、各チームは計3回同じワークショップを開催することとなる。それゆえ、担当教員は各チームを指導する4名となり、教員配置の面でもかなりの規模縮小となった。

ワークショップをデザインするうえで、受講生には次の

3点が求められた。

- ①EQ力とくに「自己理解・他者理解」を高める内容
- ②新入生の緊張をほぐし大学生活へのモチベーションを高める内容
- ③アクティビティ後に「自己理解・他者理解」を考えるワーク（振り返りの時間）の実施

「自己理解・他者理解」を促すアクティビティ（①・②）は2時間のワークショップとして企画された。かつてのEQTのような共通のワークシートや講義スライドはなく、教室ごとに内容が大きく異なるものとなった（ただし、③は全チーム共通の内容）。

なお、ワークショップデザインI受講生は、新入生をEQワークショップに招待するウェルカムカードを作成した。入学式での新入生への配布物に同梱されたこのカードで、各新入生に対して自身が「何日目のどの教室に割り当てられているのか」を知らせるためのものである。

「EQ スタートアップ」の結果

EQ スタートアップは次のようなスケジュールで実施された。まず、新入生向けガイダンスで教員がEQ スタートアップという催しについて案内した。その後、ワークショップデザインI受講生の指示で、EQ スタートアップで使用する名札への記入の指示が行われた。各日の教室への誘導も受講生が行った。

行事の趣旨説明と、担当教員やワークショップをファシリテートするワークショップデザインI受講生の紹介は、各日の参加者約115名程度が1教室に集めて行われた。その後、休憩を挟んで教室（30名弱ずつ）に分かれてアクティビティが行われた。アクティビティは各教室とも、アイスブレイクを兼ねたアクティビティ（ワーク）と本格的に「自己理解・他者理解」を高めるためのアクティビティ（ワーク）をそれぞれおよそ1時間ずつ行った。

- ・4/5 午前：学科別ガイダンスでEQ スタートアップの案内（教員）
EQ 質問紙への回答の指示（1回目）
- ・4/5～4/7 午後（各日も学科混成の約115名ずつ）
 - 13:00：趣旨説明、教員・上級生紹介（1教室に全員集合）
 - 13:30頃：30名弱ずつの4教室に分かれて移動・休憩
 - 14:10頃：各教室で「自己理解・他者理解」を深めるアクティビティ
 - 16:00頃：振り返り（「自己理解・他者理解」を考えるワーク）
各教室でラップアップ・EQ 質問紙回答（2回目）
 - 16:30頃：終了

新入生のEQ力の向上について、EQ スタートアップの効果をかつてのEQトレーニングIと比較するために、EQ スタートアップの前後でEQ 質問紙によるアンケート

調査を行った。1回目はガイダンス内で、2回目は各教室での振り返り後の時間に、Microsoft Forms で作成したアンケートフォームへのリンク（QRコード）をスライドで掲示し、スマートフォンから回答する仕方で行った。

詳細は別稿に譲るが（寺田ら, 2025）、EQ スタートアップの前後での参加者のEQ力は、2022年度に実施されたEQT Iでの調査の結果とほぼ同等であった。アクティビティを「自己理解・他者理解」を高める内容とすることを徹底したせいか、あるいはアクティビティによる学生同士での親睦が深まったおかげか、規模を大幅に縮小したにも関わらず上々の結果となった。

一方で、EQ スタートアップの企画・準備は入学式前の春休み期間に行われたため、行事そのものの規模は以前に比して縮小されたとはいえずワークショップデザインIの受講生・担当教員ともに負担が大きかった。また、ワークショップの企画に関しても、①「自己理解・他者理解」を高める内容と②新入生同士の親睦を深める内容を「1つのワークショップ」として成立させる難しさが露呈した。2024年度からは2023年度までの2学部3学科から3学部5学科となり、すでに余裕のないガイダンス期間に2023年度と同じ形でEQ スタートアップを続けていくことは難しいという結論となった。

2024年度以降のEQ教育プログラム

2024年度からは学部学科の新設・改組によって大学全体のカリキュラムも大幅に変わり、EQ スタートアップのような（縮小されたとはいえ）全新生を対象とするような大規模な催しを行うことはできない見込みであった。しかしながら、周南公立大学の中期目標には「EQ教育」が掲げられているように、全学的にこれを推進する姿勢には変わりがない。周南公立大学では2022年度の公立化に際して、「個人、地域、社会全体のウェルビーイングを高めることに貢献できる、分野横断的・学際的な人材を育成する」ことが教育目標として掲げられた（周南公立大学, 2022）。これを目標のもと、2024年度よりウェルビーイングに関する基礎的な学習を行う「周南 Well-being 創生入門」が全学部1年生の必修授業として開講されることになった。ウェルビーイングを高める主体に求められる資質としてのEQに着目し、この授業の中でEQについての知識面・理論面での教授をすることとした。

しかしながら、EQTやEQ スタートアップがアクティビティを含んでいたように、EQ力そのものは実践を通じて鍛えられる必要がある。この部分は、当初より新たなEQ教育プログラムの柱と目されていた「ワークショップデザインI～III」を実践面での基幹科目と改めて位置付けた。ただし、「ワークショップデザイン」は全ての学生が受講する性質の授業ではない。大学を挙げてEQ教育を推進していくため、周南公立大学の授業全体でカバーしていくこととした。

EQ力はコミュニケーションの生じる場においてその発揮が求められ、また鍛えられる。コミュニケーション負

EQ教育プログラムの全体像

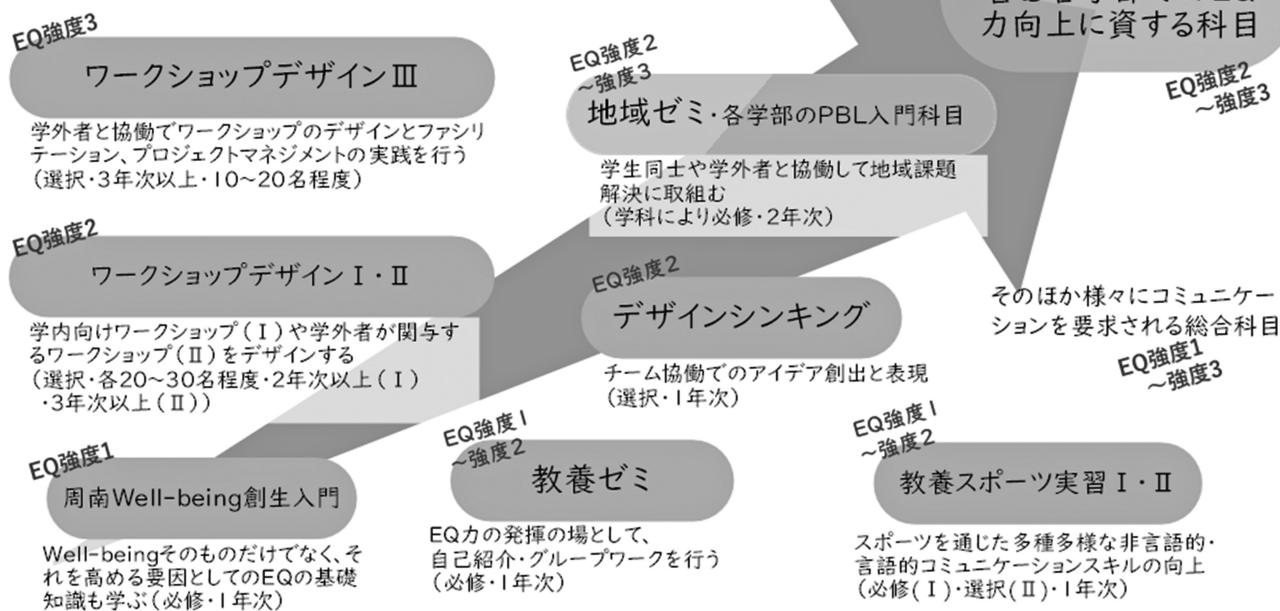


図5 周南公立大学EQ教育プログラムの全体像

荷によってEQ力の伸長することの自覚化を学生に促すことで、実践面を補うことができると考えられる。すなわち、授業において生じるコミュニケーション負荷の強さを可視化する。この方針のもと、授業のコミュニケーション負荷の強さを、その対象(学内関係者⇄学外者)と程度・重要度(高い⇄低い)の二軸で整理し、3段階からなる「EQ強度」を策定した。

●強度1

- ・対教員や学生同士での軽度のコミュニケーション(意見交換・ディスカッション等)が生じる授業
※そのコミュニケーションが授業進行や学修目標に対して本質的な位置を占めない

●強度2 次のいずれか

- ・学生同士の協働作業によって進行する授業
※学生同士のコミュニケーションが授業進行 or 学修目標達成にとって本質的
- ・学外者が軽度に関与する授業
※課題解決のための情報提供や発表時の講演、講演での質疑などの学外者との軽度のコミュニケーションが生じる

●強度3

- ・一緒に課題解決活動に取り組むなど、学外者との関りが授業進行 or 学修目標達成にとって必須となる授業

このEQ強度を全授業に対して調査し、学生に対して

提示する。学生はコミュニケーション負荷の高い授業を選んで受講し、自覚的にEQ力を高めることができるという目論見である(図5)。本稿執筆時点では、全教員に対する担当科目のEQ強度の調査を実施しているところである。将来的には、LMSに受講した授業の累計EQ強度を表示したり、目標とすべき累計EQ強度の目安を設定したりすることで、より自覚的なEQ力向上を目指せる体制としたい。

EQ力の可視化

これまでEQ教育プログラムの評価は2016年に策定された大学独自のEQ質問紙(小松・岡野・石川, 2016, 2018)を尺度として、参加学生へのアンケートによって行ってきた。2023年度までは入学直後の授業・行事の前後でこれを測定していたため、この授業・催しの効果を測定することができていた。しかし、2024年度よりEQ教育プログラム推進の体制も大きく変わり、特定の時期に催されるEQ力向上の一斉行事がなくなったことで、大学教育全体でEQ力向上を図る体制となった。この体制がどのようにEQ力向上に寄与しているかについて、リアセック社のPROGテストを活用することとした(https://www.riasec.co.jp/prog_hp/)。PROGテストは認知能力(リテラシー)と非認知能力(コンピテンシー)を測定するものであるが、EQはこの非認知能力(コンピテンシー)に関わる。これを客観指標として、1年次と3年次の変化をみとることで新たなEQ教育プログラムの評価を行っていく予定である。また、主観指標としてのEQ質問紙の質問項目や活用についても再検討を加えているところである。

引用文献

- 岡野 啓介 (2021) .「地域に輝く大学」の確立に向かって—2000 年以降の徳山大学の教育改革を振り返って— 徳山大学論叢（徳山大学創立 50 周年記念論文集）, 93, 1-54.
- 小松 佐穂子・岡野 啓介 (2023) . 大学における感情知性教育の実践 デザインエッグ社 .
- 小松 佐穂子 (2017) . EQ トレーニング I における教育効果の検討 徳山大学総合研究所紀要, 39, 37-45.
- 小松 佐穂子 (2020) . 大学における EQ 教育の効果とその持続性の検討 徳山大学総合研究所紀要, 42, 27-36.
- 岡野 啓介・石川 英樹 (2014) . 地域活性化人材に求められる能力とその測定指標—EQ 教育の効果の可視化を目指して— 徳山大学論叢, 79, 27-53.
- 小松 佐穂子・岡野 啓介・石川 英樹 (2016) . EQ 教育の効果測定のための尺度開発 徳山大学総合研究所紀要, 38, 75-84.
- 小松 佐穂子・岡野 啓介・石川 英樹 (2018) . 教育効果測定のための EQ 質問紙の開発—信頼性及び妥当性の検討— 徳山大学総合研究所紀要, 40, 37-45.
- 周南公立大学 (2022) . 「大学の基本理念」. 周南公立大学 . <https://www.shunan-u.ac.jp/about/philosophy/> (2025-3-10 閲覧)
- 寺田篤史・中嶋克成・赤木真由・大坂遊・岡井理香 (2025) . EQ 育成を目指した新入生向け自己理解・他者理解ワークショップ—2023 年度 EQ スタートアップの実践— 総合教育センター紀要, 1, 42-50.